

# 「木構造への回帰」

萩原 太一



写真 雲越家住宅資料館（重要有形民俗文化財・みなかみ町藤原所在）



写真 下仁田町伐採現場（群馬県産木材のルーツをたどる視察会にて）

ここ数年、住宅における性能設計を目的とした木造建築物の構造設計依頼が多い。

そのきっかけは、2006年頃に2階建ての木造住宅について品確法の耐震等級2以上の住宅性能表示検証作業の依頼を受けてからである。それまで、木質構造の設計は年間1~2件程度だったが、ここ数年は10件程度の依頼がある。

父親が大工であったため、物心ついたときから木造建築に接していた。住まいと兼用した作業場は木の香りと油のおいが混ざっていて、鉋やのみを触って怪我をしたこともあったが、夏休みなどには現場に行き、片付けや下地ボードの釘打ちなどを経験したりしていた。

また、母の実家が茅葺きの古民家だった。訪れる度に、その太い柱や梁の存在感を感じていた。

そんな幼い頃からの環境から、木造架構の建方や建物が完成していく過程を見ていくうちに、建築物とりわけ構造架構への興味を持ちはじめたのである。

やがて工業高校の建築科に進学し、専門知識を学習していくのだが、木造に関する教科は意匠系の内容が多く、構造についてはRCや鉄骨に関するものが中心であった。

建築の学習のなかで特に印象の深かったのは作成したレポートのテーマである。

それはロンシャン礼拝堂や落水荘などについて書いたものだが、その内容よりも「機能」と「形態」というテーマが今に至っても建築物へのキーワードとなっている。

高校を卒業し、建築設計事務所での業務として構造設計に携わるのだが、仕事量も多くやがて夜間短大との両立が困難となり、専門分野の学識を得ることができなくなってしまった。実務を通して得た知識は、やはりRC造やS造ばかりで、木造建築物の構造設計依頼は殆どなく、おのずと木質構造に関する知識から遠ざかってしまっていた。

冒頭の木造住宅の検証作業を通して、筋かいや面材耐力壁の耐力および釘のせん断耐力等各数値の根拠な

どに関する知識不足を痛感したため、日本建築学会や各種団体の在来軸組や伝統構法における限界耐力計算など木造構造に関するセミナーに積極的に出席している。スケジュールが合えば木材の伐採や古民家の見学会などにも参加している。ここ数年は、毎年7~8回程度、複数の連続セミナー受講のため東京へ通っているが、木質構造に関する内容は材料から架構形状まで多種多様でかつ奥深く興味が尽きない。

古民家などのシンプルで合理的な架構組を見るにつけ、「機能」と「形態」そして、その「美しさ」に再び思いを巡らせているのである。

この思いは尽きることはないであろうし、これからも建築を楽しみ続けたいと思っている。

（次回は松村 和美氏）

（はぎわら・たいち）  
1958年生まれ 群馬県出身  
76年群馬県立前橋工業高校  
建築科卒業 現在、萩原構  
造計画事務所代表取締役一  
級建築士 構造設計一級建  
築士 構造計算適合性判定  
員 趣味はギター ポーリ  
ング

